Ⅲ　プロジェクト研究報告

〈プロジェクト研究報告　1〉

流域文化の成立と定住様式の変遷に関する文明生態史的研究　（昭和54年度）

斉　藤　一　雄

はじめに ― 初年度の補足と第2年目の目標

本報告は学内プロジェクトとして行われているもので，主として第2年目の経過（総括は秋季）を要約したものである。研究代表者は辰巳修三教授である。本報告は都合により総括グループの一人として，筆者が行なうこととなった。

本研究は，北上川流域を対象として定住環境の諸問題を解明すると共に，その活動をつうじて萌芽的段階にある環境科学の方法をきたえあげようとする目的ではじめられた。

この大型プロジェクトの進行の過程で，科研費による安家の調査研究や自主研究の琵琶湖プロジェクト等がはじまり，人事の異動分散などもあって，当初の組織とその活動に多少の変化が生じた。それらは，何よりもプロジェクトの目的への執念と，そこに結集される和をもってこれを克服してきた。また，この調査研究の中で，かなりの学生の参加があり，教育研究活動の一環としてすすめられ，修士論文等となって相当の成果をあげたことも特筆されるべきことであった。

さて，第1年目（昭和53年度）は，川喜田二郎教授のＫＰＡ（Key Problem Approach）のいわば問診段階で，研究者同士，研究者と住民との間で問題意識の共有化をはかり，地域で〈何が問題になっているか〉を明らかにし，〈そのための調査対象〉を発見することに向けられた。問題となっているものは，一般に住民とのＢＳ（ブレインストーミング）によって得られるが，土地空間にみられる現象（歴史的刻印である）からも補足される。後者は空間特性として観察によって現象の特徴を把握することができる。

ここに，環境科学研究科年報2に集約した第1年目の成果の記録に若干の補足をしたい。この成果は54年7月7日，筑波大学大学会館特別会議室で学内報告会が行われ，つづいて7月16，17日現地報告会が一ノ関，湯田，盛岡で行われた。学内報告会では約150名の参加があり，現地報告会も多数の出席を見，研究者，住民，マスコミ他一般の人たちの本プロジェクトに対する関心や期待のつよさが如実に示された。内容の詳細は昭和53年度調査研究報告書及び資料集（筑波大学大学院環境科学研究科，北上プロジェクト研究事務局）にしるされてある。簡約すれば，現地調査からの問題提起として，(1)定住意識と自立に関する地域ポテンシャル（歴史，人間とくにリーダー，空間特性等）について中心課題が示された。個々については次のとおりである。即ち，(2)農業と自然条件，(3)昔話の型の示す地域差，(4)流域の治水利水と定住様式との関連，(5)社会医療の実態，(6)都市化と過疎化等の概括的な報告である。全体をつうじて流域の治水利水と生活様式の変化との歴史的対応，都市化による農村の変貌過程とそれから逸早くたち直ろうとする地域独自の方法による

自立への努力が，主として現象的な段階でのまとめとして印象的に述べられたものといえる。

第２年目は，初年度の成果をふまえて，ＫＰＡを確認して初年度段階の補完作業を行うと共に，問題の相互関連等から Key Problem をつきとめることであり，テーマの性質に応じてデータを集積し，事実をつきとめる段階であって，いわば構造的段階といえるであろう。そのために各種の解析手法を正しい位置づけをもって駆使する，或いは新たに手法開発を行うことも含まれる。しかし，北上川流域の調査対象地は，和賀川流域や松尾村の様に２年目に入ったものと，安家，遠野，都市群，下流域など本年からはじまったものもある。後者は前者の調査経験をふまえつつそれぞれ独自の領域，面積，対象にもとずく性質に対応してその調査方法及び精度レベルを考慮せねばならない。この様な調査進度のズレを内蔵しながら，それぞれの経験を適時集約して北上川流域全体の問題をも討議していくこととなった。したがってこれに費された事務局のエネルギーは莫大なもので，とくに初年度以来文部技官齊木崇人，土方正夫の両氏の活動に対しては特記してその労苦に感謝するものである。

1　方法論の模索

２年目に入り，データの集積に伴ない，あらためて方法論についての議論が総括グループの間で行われた。この総括はまだ充分ではないが，筆者の理解するところでは次のとおりである。

まずＫＰＡと他の手法との関係についてである。ＫＰＡ論は，ものごとの本質（急所）を住民自身の問題自体から遊離することなくつきとめるための手順を重視した，いわば認識論的手法（ Erkenntnismethode ）として位置づけられよう。ここで最も重要なことは，川喜田教授が云う様に〈問診をし，全体の病相を観察し，そして聴診などを行い，次にそれによって血液検査等の分析に入り……病気の正体をつきとめ〉て行く様な方法であり，〈はじめからすぐ血液検査等のデータをそろえる〉様な機械的分析方法イコール科学的とする単細胞的な考え方を拒否するものである。この様な方法によって住民の問題から離れることなくその真実を統合的につかんで，住民が〈ヒザを叩いてうなずく〉様な正解に近づくことができるとする。したがって，最新の科学的分析手法の様な Arbeitmethode そのものを拒否するものではなく，それらの正しい位置づけを求めているものと理解される。

解析方法として，辰巳教授からポテンシャルマップの作成とレベル手法とが提起された。ポテンシャルマップの作成については，まず問題の性質に応じて，物的，人的，産業，文化，歴史等のポテンシャルについてのデータをつみ重ねる必要があり，データはまたレベルによって秩序づけられることから，レベルによる分析手法の確立が論ぜられた。レベル手法は筆者の知る限りでは30 年程も前から行われている方法であるが，本プロジェクトに於ては，広汎な分野に及んで各部門の統一的進展を図るという意図とそれに伴なう方法が特徴とされよう。こうした方法は，景観解析その他領域解析等で実施されたが，データの集積がすすみ，問題の相互関連がわかってくるとその必要性はますますたかまるので，今後いっそう重視され発展されるべきものと考える。ポテンシャルマップの概念も必らずしも充分成熟したものではない。しかし，これを作成するためには，前述のレ

ベル論と関連して問題解決に必要な多くの自然人文の基礎図（地形図，地質図，気象図，植生図，土壌図等々）や基礎資料をそろえることが大切である。これらを特定の目的概念によって統合化したものがポテンシャルマップというものであろう。

データがそろえられてきて，事実の相互関連がとらえられてくると，各地域の人たちの生き方のパターンが明らかになり，そのサクセッションの方向も絞られる様になるであろう。ここで，充実した意味内容をもったモデル解析もその適用範囲を含めて予想されるだろうし，同様にして環境シミュレーションの可能性も生れてくるものと思われる。今のところその具体的方式は明らかではない。ともかく以上の予測をもちながら，第2年目はなお多くのデータ集積をはかる必要があることが確認されたのである。それと共にグループの間にひとしくおこった聲は，この種の大型プロジェクトがわずか3年程度でどの程度の成果を期待できるか，ということであった。プロジェクトも2年目3年目となってくると，地味なデータとのとりくみが大切になる。目につく様なはなやかさはなくなるが，ほんとうのものが生れてくるのは，この様な地味ながい努力のなかからである。プレゼンテーションの問題もさることながら，とくに学内関係者にプロジェクトの成果に対する根本的な認識をねがうこと切なるものがある。

ここで筆者がとくにつけ加えたいのは，われわれの方法論は根本的にどこから生れてくるのか，ということである。それは，やはり現地フィールドでの体験からであろうと思う。われわれは沢内村，湯田町，松尾村，田野畑村，下流域の藤沢町や多くの市町村，安家や遠野の事実体験から，北上の人たちの生き方について多くのことを発見し且学んだ。たとえばそのひとつ，沢内村の太田村長の云う〈三せい運動〉〈指導者演出型論〉〈途中下車的問題解決論〉や〈自然循環有畜複合方式〉など。それらは問題解決の実際的な方法論として人々を動かしてきたものである。市町村の経験を示すものは，リーダーの方針やリーダーや古老のことばに限らない。人々の生き方を客観的にあらわしている土地利用の実態や景観や人々の接触，流出入などの状況も分析のし方によってはことば以上の事実を物語ってくれる。それらを総合して問題の真のありかをとらえるわけである。ポテンシャル論もそのひとつとしてうかび上ってきたものといえよう。内生ポテンシャルの充実しているところでは，補助金政策や交通計画や観光往来等の外生ポテンシャルを意識的に内的化していっている。また，種々の環境の簡易測定法（水質，水量や土壌や大気汚染等の指示植物など）があるが，それを現地で発見し，地域の人たちを動員して行う環境測定作業も，よく行われるもので，住民のちえや実態から学ぶことは，個々についての知識のみならず，方法論そのものの範ちゅうにもいきいきと存在する。

自然と人間社会とのバランスのとれた生態系を人間主体の環境系として接続的にダイナミックに展開しようとする主張が第2年目の段階で燃焼しつつある。それらは，とりわけ安家の住民と自然とのきわだって密接な構造をみることから観念的ではなく具体的に生れてきた大きな課題であり，考え方であった。

2　調査内容と集中討議

昭和54年度の調査研究は，夏季を中心として行われたが，その公開発表は10月から約3ケ月にわたって，理科系修士棟の会議室（Ａ５０５）でつづけられ，翌1月31日その集中討議が行われた。報告されたテーマは次のとおりである。

○畑作の変遷と現状（山田，大垣，鈴木）

○和賀町の農業の現状（花田，市川，中島）

○中流域の排水の環境衛生等（山中，緒形）

○農業の施設化と定住化（相原）

○モータリゼーションの問題（江崎）

○人及び所得形成力からみた農業，農村の変貌（山下）

○北上山系の荒廃裸地（岩城，足立）

○メンタルマップ（安仁屋）

○安家調査概要（齊木）

○和賀川流域，松尾村の空間特性（斉藤，糸賀，木原）

○和賀川流域夏季調査報告（土方，真貝，秋山，長橋，大山）

○下流域調査（天田他）

○都市化問題（安田，土方他）

以上について1月31日の集中討議や2月23，24日の広池学園の研修合宿での討議を要約すると次の様になる。

1）自然と人間生活とのトータルな生態系を文明生態史的に生活様式として発展せしめることが生じた。　いわゆる近代化の意味するものの矛盾と克服の問題でもある。エネルギー問題にもつながるこの命題が幻相に終るか否か，とくに安家，田野畑村，松尾村，沢内村，藤沢町等について検討が必要とされた。

2）地域自体の内側の論理と中央等からの外側の論理の統一。　北上流域というレベルでもそれ自体の論理があるのではないか。外側の，とくに中央からの尺度ですべてが価値づけられるのはまちがいではないか。町村合併，学校区，特産地，住民の団体組織など，外からゆがめられた形跡が少なくない。しかし，内側の論理が外からの論理を主体的に吸収統合し発展せしめている例もみられる。前述の町村にその傾向がみられるのではないか。

3）きびしい自然とのつよいむすびつきなしには生きてゆけなかった状態が北上のそれぞれの地域特性を生み，生き方の意識を形成してきた。大構造谷としての北上川の水のあり方（小支流，堰によって利水可能となる），洪水常襲地帯としての下流域等そこに生きてきた人々の反応が特徴づけられる。しかし同じ様な環境が必らずしも同じ様な考え方を生むとは限らないことが注意された。

4）地域の発展の節目を年表化して，歴史的発展段階を詳細に把握する必要がある。馬や牛の導入，堰やダムの建設，大型船の建設，鉄道網の出現，基幹産業と従属産業，ＤＩＤの発達と性

格等大小の節目を整理する。その自然，社会に於ける全体のシステムの変化の過程の中に大まかにでも問題の本質を見とおすことができるのではないかという期待がある。

2月23，24日の研修合宿での討議により，春季調査の方向が定められそれぞれ現地に散った。その調査研究内容は次の様に要約される。

○都市域（坂下）　交通投資（主に新幹線）の関連から都市域の将来予測を行ない次のことが判明した。盛岡以後への延長について消極的 ── 岩手県商工会，積極的 ── 盛岡市商工会議所。県と盛岡市は将来予測を計りかねており，全般的には無関心。今後広い層から意見を求める。

○遠野（掛谷他）　民家に泊って労働しながら環境の意味を社会組織からさぐった。

小出地区：純山村，地区内結婚多し。

大出地区：早池峰詣での宿坊村，血縁少。

大野平地区：開拓村，多角経営で，短角牛の放牧も行っている。

生活は国有林との関係等安家と共通しているところが多い。

○安家（川喜田，齊木他）　安家大学開講の準備。小単位の集落環境。住民の抵抗感 ── イ，金銭でわりきる，ロ，官僚主義，ハ，大都会の御都合主義，ニ，調査公害，牛のエコロジー，狩猟について調査中（詳細は別に報告される）。

○葛巻，盛岡（岩城）　岩手県管轄地誌の集約，栗，桐，ナラ，トチ，鹿，猪等の分布状態をチェックした。

○和賀川環境グループ（斉藤，糸賀，土方，真貝他）豪雪の体験，53年度調査結果のフィードバック（沢内，湯田，和賀，江釣子，北上），調査報告（長橋），国見山，文化圏，鬼剣舞，神楽の史的調査。

○和賀川農林工学グループ（相原，江崎他）　機械化，施設化についてアンケート調査，機械公社，ミニライスセンターヒアリング。兼業農家の省力化進展。

○北上川流域（黒崎）　中，下流域での明治期の地域状勢の復元，産業関係の細部資料収集に力を入れる。

○北上川下流藤沢町（斉藤他）　集落（平均55戸）単位の公民館活動，研修バスによる学習活動，集落諸計画の作成（ミニ計画）等徹底したコミューニテイ活動が特長で Key problem の把握が明快である。

○岩手県域自然保全（藤原）　全域一巡して概要把握。

○松尾村（糸賀他）　調査報告（木原），大好評で協力体勢が拡大強化された。

○田野畑村（斉藤，糸賀他）　比較研究の重要地区として視察。第1段階の Key Problem は閉鎖的集落のエネルギーの統一で"思惟の森"造成と交通網の建設。内生ポテンシャルとしての有用植物の自力調査と工業化に成功。

以上の調査の中で，岩手県管轄地誌の発見と集約は高く評価された。歴史的変遷については北上山地の明治期の植生や動物分布の情報をカバーする文献としてこれまでくわしい資料が見いだされなかったためである。和賀川流域山地地区の豪雪の体験は従来の我々研究者の見方を大きく変える程その影響の深さを知らされたものである。それは山地地区と平地地区との文化領域の相違と統一の

問題である。一方，北上東岸台地に栄えた国見山文化と山地地区との関係が西方浄土思想を媒介として景観的心理的結びつきをもつことが議論され，今後の研究が期待されたことも主な成果のひとつであった。この頃から黒崎教授，川喜田教授等歴史地理学的知見が，これまでの自然，人文グループの諸調査諸研究の意味を相互につなげる作用をもちはじめた。それは各グループの調査の蓄積が，歴史地理学的知見を要求するまでに成長してきていることを示しているといってよい。和賀町の農業機械化を調査しているグループは，機械化システムと農畜システム，それを支える社会組織（共同利用等）の連絡の必然を予見するに至り，農林，農工，総括グループのディスカッションが行われるに至った。これらは，第2年目の成果が徐々にあらわれてきたことを示すものである。それぞれの地区グループは研究の進捗度のちがいにもかかわらず，夫々の討論のなかから，北上川とはなにか，そしてルーツとしてのエゾとはなにか，という問題を具体的に生き生きと議論の前面におし出しはじめた。まさに，流域研究が地味ではあるが，うねりをおこしはじめた段階であった。

3　和賀川流域を中心として

和賀川流域が他地区と著しく異なる点は，調査年度が早いことと，最も広大な領域（和賀川88 km ）を包含すること，であろう。諸地区のうち，流域的な調査として最も重点がおかれているということもあって，この地域についての昭和54年度の調査の概要をしるすこととする。

まず，和賀川流域全体の問題として，その大きな特長と傾向とを示せば次の様になるであろう。

イ，水系を単位とする定住圏という発想があるが，和賀川流域に於ては，その文化生態（生き方）の同質性は歴史的に認めにくく，単純ではないこと。

ロ，湯田ダム建設（昭39，1964）以来，上下流域関係はつよくむすびついたが，同時に相反する利害関係におかれたこと。

ハ，湯田ダム上流及び下流域に於て新たにダム開発のうごきがあり，これは北上川の治水利水問題につながること及び水系環境が流域の開発の環境影響を反映する（和賀川をまもる会の存在）という水の物質循環上の性質から，流域の真の意味の総合開発への要望が予見されること。

そこで，全体として次の様な問題整理が必要となる。

イ，流域の領域論

ロ，地域形成の構造（上記と関連）

ハ，近代化問題

ニ，環境シミュレーション

これらの項目の設定や内容について総括グループで十分に討論してはいないが，ひとつのまとめとして総括グループ内で諒承を求めたコメント〈和賀川流域に於ける農村環境計画の諸問題〉（昭和54年度日本造園学会春季大会発表要旨 ── 斉藤）にもとづいてしるすこととした。

3.1　流域の領域論

和賀川流域の諸地区が，行政単位にもとづいて次第に実質的な領域形成を固めつつあるのは自然の勢いともいえるが，なお歴史的な領域の存在をたたみこんでおくことは，真実の意味と，それが

もつ将来の変化適応の自由度を保障する意味でも重要と思われる。領域決定には，行政区や地形，気象，植生，産業，ことば，民話，血縁社会，交流圏，経済圏等の同質性を大小のレベルを尺度として見定めるという方法がある。いま，わかってきた種々の領域論的特徴は次のとおりである。

イ，和賀川は〈母なる川〉として共通に流域市町村から親しまれている。他地域代表との会合に於ては，最近流域市町村として結束する傾向がある。

ロ，仙人峠によって，地形上山地地区と平地地区とに大別され，それらはさらに夫々細分される。

ハ，山地地区と平地地区とは，山地型気候（II_e，多雪）と最も温暖な気候（V_b，最も温暖，内陸性）とによって区分される。また，ことばによって，民話の型によって区分される。

ニ，その他集落形態，産業構造，土地利用の形態，人の流出入のタイプ等によって区分され，さらに種々のアンケートの反応型や主成分分析によって区分される。

これらは，問題の性質によって種々の領域の選定が可能となるであろうが，真の総合開発の最も基本的な課題は，そこの自然とむすびついた人間社会の生き方を内包した生活様式の変遷といえるであろう。たとえば，山地地形と豪雪は人々の生活様式を平地のそれと大きく異ならしめる基盤となる。ことばには山地和賀独特のものがある。郷土史家佐々木政蔵氏によれば，〈ぱっぱふところ〉〈せこがし〉又は〈せこぎ〉ということばは，西和賀独特のものだという。山地は環境がきびしい。和賀の山地では，足腰のたくましさが必要で，歯が立たない，働らかない，歩けない様な人は生きてゆけなかった。飢饉の時にはワラビの根モチをつくってしのぐ。ワラビの根を掘りとり，槌でうち，アクをぬいてねぶみに沈澱させるという大変な努力がいる。せこがし（ころげる）はワラビの根モチを食えない。けんめいに働けば平地の水田地帯とちがって飢饉のときでもしのいでいける山野の資源があった。しかし，せこがしでは生きていけない。それが沢内や湯田だという。この様な生き方がかこわれた空間形，奥地豪雪地帯その他の自然性や，そこにつちかわれた自己開発型の思想にむすびついてひとつの生活様式をつくりあげていたと思われる。その生起と変遷の方向を領として明らかにする作業が進行している。

3.2　地域形成

地域形成とは，そこの土地利用の形態構造の変化が行われることを云う。その変化が何によってもたらされるかを明確にせねばならない。その内生ポテンシャルとしては，リーダーの体験，リーダーを支持する層の性格，人々のむすびつきの強弱性質，空間特性，Key Problem の明確な把握等がかぞえられよう。そこでオーガナイザー論が出てくる。地域形成者はなにかということで，前述のリーダーなどは重要なオーガナイザーのひとつである。これと関連して〈みず〉と〈みち〉及び〈情報〉のながれが指摘された。和賀に於ては，後者では，堰やダムの建設，港（黒沢尻），ＤＩＤの発達などが形成の歴史的な節目を形成する。それらの事実が次第に明らかとなってきた。ＤＩＤとなるものは，和賀に於ては，古くは秋田の六郷，横手が大きな存在であった。現在では，沢内が盛岡，湯田と横手と北上，和賀と江釣子と北上，北上と盛岡というつながりが流出入のデータ（土方）で明らかにされている。ＤＩＤとしての北上市の役割は重要で，その分析が若干行われた。そしてこれらによって起る地域の変化が，長い時間をかけて領域論にはねかえっていくことが歴史

的に検討された。しかし，なお不十分の状態である。

3.3　近代化問題

〈連帯感の喪失〉〈中央志向〉〈機械化貧乏〉〈親子の断絶〉等々53年度に問題になった多くの Key words は地域についてそれぞれ相応の意味をもつものであるが，それらは一応〈都市化〉〈農村の近代化〉の側面として概括されるものである。2月23，24日の広池学園での研修合宿でやはりこの問題が蒸しかえされた。というよりも，どんな調査でも現在必らずぶつかる性質のもので，プロジェクトの提案に必らず中心課題としてあらわれることが予測される。

〈近代化の嵐が明治，大正，昭和にわたってやってきた〉〈近代化とは完成したひとつのエポックの様に考える人がいるがこれは変革の途中ではないか〉〈物質文化というかテクノロジー，経済の方が先行して文化のもっているソフトな反面がおくれている，いわゆるカルチュラルラグがあるので，北上だけでなく世界中の問題となっている〉〈近代化はまだ追求されていない。そこで伝統的なものにかえりその足らないところを補っていく〉〈安家ではいつも米作中心の主流派の価値感を通して近代化が遅れているとみられていた。スペースの方から東北日本の生活様式とその他の日本の生活様式，2つの型をたてようという見方に私は傾いている〉（川喜田）

また，エネルギーの問題も出た。〈オンサイトとオフサイトの問題で，例えば石油みたいなものはオフサイトだ。その場でつかうオンサイトの資源としては太陽エネルギー，風力などで，雑木林も重要な資源だ〉（岩城）。こうしたエネルギーの見直しという点からも北上山地の住民の生活を新しい価値観をもってとらえようとする。和賀川流域についても事情はほぼおなじである。米の減反政策で，沢内村や和賀町ですばやくこれに応じた事情はもっと検討を要する（特に長瀬野の場合）が，米作主流派へのひとつの批判が働らいていることも考えられるし，エネルギーの無駄のない真に合理的なつかい方や手づくり礼讃とつかいすて批判というケースがうごきつつあるのも，より科学的な立場から組織づける要があるだろう。

和賀川流域に於て大きな問題は〈農業機械化〉である。これも全国的な問題であるが，和賀町はモデル地域であって，機械化は全国平均を上まわる。ここで出てくる〈適正技術〉の問題が，近代化論へのひとつの解答となるであろう。適正技術の概念については種々あるであろうが，すでに農林グループの中で，政策と実態とを背景として機械化と畜産，作物，山林との連結，之に対応する社会組織（共同利用など）の模索を行いはじめたのはその方向といっていいであろう。我々の答は，一般にはそのものズバリの技術そのものとはならないであろう。自然，社会，技術という生産力の構造又は技術を主体とすれば技術体系というものの歴史的な方向を地域の中で示すことができるかどうかがゴールとなろう。そしてその体系が，地域の環境のバランスのとれた形成をダイナミックにサクセスしてゆくことのできるものとして，すぐれた文化といえるものに方向ずけられるということの議論がなされなければならないだろう。我々の研究の進度からいって具体的にそこまで到達できるかどうかはまだわからない。

次にスペースの問題がある。沢内や湯田の民家はカヤぶきから大部分トタンの新建築にかわった。室内は明るく衛生的になり，個室がとられ，雪おろしの手間は大分省ける様になった。従来，カヤ

ぶきの家には縁側がついており，家敷間には小みち（家みち）がついていた。小みちで朝晩のあいさつをかわし，時に縁側でお茶のみ話をしたものであった。つまり，家みちと縁側は，コミュニティの親密な空間形成の最も基礎的な場であった。それが消失した。農家の主人がこのことを指摘して，家はよくなったが縁側がなくなって人と人との縁もうすくなったという。縁はハシであり，また家の内外空間の接点としての重要な意味をもつものであるが，人と人とをむすぶ機能をもつことを改めて知らされた。これはつまらない話だという人もいるかも知れないが，空間形成についての象徴的な指標のひとつとなるものであろう。我々のプロジェクトの最も基本的な課題となっているものは，人と人とのむすびつきのあり方つまり様々の歴史的な〈縁〉であろう。我々は，この失われていく縁側の縁に見合う空間をひろく用意しなければならない。それも都市空間の移植又はミニコピーではなくて，農村のもっている歴史的なストックの中で真に活性化できるものを用意せねばならないだろう。このことについて住民のストックとして，農民の魂をほりおこして継承する湯田のぶどう座の活動，西和賀高校の西和賀巡検活動，北上東岸を歴史のかがみとしてのこそうとする北上の人たちのうごきなどが報告された。近代化という問題はむずかしい。地域の歴史的な発展方向に，統一的な環境のシステムを目ざして行われていく生活努力以外に今のところ我々の議論はつきすすんでいない様である。ともかく第2年目は近代化問題について以上の議論のなされる程度に事実の蓄積があったということであろう。都市と農村との関係についてはまだ資料の集積がうすい。

3.4　環境シミュレーション

現在のところ，環境シミュレーションの具体的な方法については適確に述べるまでになっていない。既述した様に，問題の性質とそれにかかわる因子と因子の相互関係の意味とを充分に知ることが大切な段階である。しかし，何らかの方法で，環境シミュレーションの体系は創造しなければならないだろう。この事項についての討論は昭和54年度に於ては，抽象的にはあったが，成果としてここに報告するまでに至っていない。

調査研究者

代表：辰巳修三

都市域：坂下昇，安田八十五，土方正夫

北上山系：遠野・掛谷誠，小口千明，他

安家・川喜田二郎，糸賀黎，齊木崇人，他

葛巻・岩城英夫，他

和賀川流域：○辰巳修三，斉藤一雄，糸賀黎，土方正夫，真貝宏，秋山洋子，長橋敦，他

○相原良安，江崎春雄，佐原伝三，上野正実，瀬能誠之

○鈴木博雄，他

北上川中，下流：○黒崎千春　○天田高白，林日出喜，他

松尾村：糸賀黎，木原茂夫，他

農林：○小田桂三郎，大垣智昭，鈴木芳夫

○花田毅一，山下雄三，市川忠雄，中島紀一，清水利昭

環境衛生等：山中啓，緒形隆之

メンタルマップ：安仁屋政武

自然保護：藤原英司